

The American における アメリカ人であることの確認

後川 知美

『アメリカ人』(The American, 1877) は、当初掲載が予定されていた雑誌ギャラクシー (Galaxy) とジェイムズ (Henry James) との間で掲載をめぐる交渉が決裂し、その後ジェイムズの友人でもあるハウエルズ (William Dean Howells) が編集長を務めるアトランティック・マンスリー (Atlantic Monthly) への連載が決まったという経緯をもつ。ジェイムズは、『アメリカ人』以前にも、旅行記や短編の数々、そして長編『ロデリック・ハドソン』(Roderick Hudson, 1875) を執筆していたが、作家としてはまだ駆け出しであった。当時パリで執筆生活を送っていたジェイムズは、実家からの経済的援助もあまり期待できない状態であり、批評家エデル (Leon Edel) によれば、まずは自らのペンで生計を立て、自立したいという思いがことさら強かったようである (245-47)。

それから約30年後、ジェイムズは、自選集「ニューヨーク版」(New York Edition, 1905-07) に『アメリカ人』を収めるため、改訂をほどこしている。その改訂は、批評家ポーター (Carolyn Porter) が表現するように、「重苦しい (文体に) 書き換えられた」(99) ものである。また別の批評家ゲットマン (Royal A. Gettmann) が、「形容詞や挿入句の付け加え」や「一般的な表現を正確な表現に置き換える」(463) と指摘するように、プロットの変更に関わるものではなく、表現をより繊細で具体的なものにする作業が中心の改訂だったと考えられる。ジェイムズがこのような改訂を必要としたのは、後期のジェイムズの特徴となるような、執拗なまでの用意周到さが、オリジナルの『アメリカ人』に欠けていたためでもあるだろう。ジェイムズは、「ニューヨーク版」の『アメリカ人』の序文で、この連載が「まだ多く書かれていない状態で始められた」(1) こともあり、きちんと完成できるか不安を抱いていたことを告白している。またジェイムズは、『アメリカ人』の主人公クリストファー・ニューマン (Christopher Newman) と彼の婚約者である貴族の未亡人、クレール (Claire de Cintre)、および彼女の実家であるベルガルド (Bellegarde) 家との関わりについての描写などに至らない点があることも、序文において認めている (13-14)。

先行研究では、ニューマンを成功者だとして肯定的にとらえる見方と、失敗者

であると否定的にとらえる見方とがある。例えば、批評家ポワリエ (Richard Poirier) は、ニューマンが彼の計画を実行できなかったのは、貴族社会の悪巧みに妨害されたためであり、彼自身の判断力が劣っていたからではない、とみなしている (459)。また別の批評家ロウ (John Carlos Rowe) は、ニューマンは年齢の割に無垢な面を持っているが、これは彼がヨーロッパの慣習に親しんでいないためであると好意的に解釈する (70-71)。

その一方で、ジェイズの自伝的要素をもとに彼の作品を心理学的に分析するエデルのように、ニューマンが「ジェイズがアメリカにおいて嫌っていた要素」(418) をすべからく反映する人物であると見るものもある。また批評家ベル (Millicent Bell) は、ニューマンの性格があまりにも抽象的で現実味を帯びていないと指摘し、それはジェイズが「大げさなロマンス風」の手法を用いて『アメリカ人』を書いたためだと主張する (47)。またニューマンを否定的にとらえる批評では、彼の成金趣味や拝金主義的な側面を指摘する傾向が強く、彼がクレールと結ばれなかったことや、ベルガルド家に復讐する機会を得ながらもそれを放棄した行為を厳しく追及し、彼に失敗者の烙印を押すのである。

このような先行研究に見られるニューマンの評価の対立は、彼の人物像を曖昧にしているようである。批評家ハウ (Irving Howe) は、ニューマンのなかに上記のような二つの要素があることを認め、それぞれの特質は、個別に見れば納得のいくものであっても、その二つの要素がニューマンという一人の人間の中に同時に存在するとすると、人間として現実味がないとする。ニューマンの人物像は、ハウが示したように「自己矛盾した人間」(445) という言葉に集約できるだろう。

このように、ニューマンの矛盾する性格は、常に議論の対象となってきた。しかし、その矛盾を、若きジェイズの人物造形の曖昧さのせいだとし、描写上の欠点として片付けるだけでは、偏った作品理解になるのではないかと思われる。そのため、ニューマンがどちらの人物であるのかを見極めることや、『アメリカ人』の構造や描写に見られる未熟さなどの分析にはあえて踏み込まない。本論ではむしろ、ニューマンの矛盾や、作品の欠点と見なされる部分をそのまま受け入れ、そのうえで、このような矛盾をもたらした原因がどこにあったのか、とくにニューマンと富との関連から、ジェイズがこの小説を通じてアメリカ人であることをどう表現しようとしていたか考察してみたい。

第一章：拝金主義に対するニューマンの態度の曖昧さ

金儲けが人生の主目的であったニューマンが、ビジネスの世界から足を洗い、教養や文化の吸収を求めてヨーロッパへ赴くことにしたのは、彼が関わっていた、ある株取引での事件に由来する。ニューマンは、その株取引で大金を失うかもし

れないという窮地に立たされ、その原因を作った男への復讐を企てる。しかしニューマンは、移動中の馬車の中でうたた寝から目覚めたある瞬間に、突然、金儲けやそれをめぐる復讐に翻弄されるのは愚かなことだと悟る。後にニューマンは、その際に感じた心境の変化を、次のように回想している。

I couldn't tell the meaning of it; I only felt that I loathed the whole business and wanted to wash my hands of it. The idea of losing that sixty thousand dollars, of letting it utterly slide and scuttle and never hearing of it again, seemed the sweetest thing in the world. (34)¹

ニューマンは、自分を陥れようとした男への復讐を断念した理由が何なのかを、はっきりと把握できてはいない。しかし、彼は、金の世界から足を洗うこと、金をその憎むべき男にくれてやることに、むしろ清々しさを感じている。この心境の変化をきっかけに、ニューマンは、当時のアメリカのビジネス社会でまかり通っていた、金銭最優先といった価値観に、嫌気を覚えるようになる。そしてニューマンは、金メッキ時代のアメリカ社会に蔓延していた拝金主義に特有の、損得勘定を優先する思考や行動に、大きな疑問を抱くようになるのである。

しかし、そのような心境の変化を経験したにも関わらず、パリでのニューマンは、拝金主義や商業主義に基づいて行動しているようである。『アメリカ人』の冒頭の場面では、数々の歴史的名画に彩られたルーブル美術館の一室が描写されている。芸術を鑑賞するニューマンは、「アメリカ人の力強いタイプ」(18)と称されていることからわかるように、絢爛豪華で文化の香り豊かな環境には不釣り合いな存在でもある。そのことは、ニューマンが本物の絵画に囲まれているにも関わらず、絵画の前で模写家たちが取り組んでいる「模写のほうに強く興味を引かれている」(17) ことから窺える。

ニューマンはそれらの模写の購入を希望し、模写家であるフランス娘のノエミ(Noémie Nioche)と値段交渉をする。その際ニューマンは、ビジネスの勘を發揮し、したたかなノエミの模写したムリリヨの聖母像が、彼女が提示したほど高額なものではないことを容易に見破る。さらにニューマンは、これから彼が買い取る予定の模写の色合いに注文を付けたり、もし模写が彼の望むような形で描かれていない場合は取引を中止する、とノエミに宣言したりする。ニューマンはこのような一連の行為を通して、いかにも芸術を理解しているかのような気分を味

¹本論における『アメリカ人』からの引用ページは、マクミラン社から出版された版(1879)に基づいたノートン版を使用し、以下、カッコ内に数字で示す。

わっている。しかしニューマンの行為は、芸術作品に精通した鑑賞眼から来るものではなく、絵画を、彼が慣れ親しんだビジネス世界に流通する商品の一つとみなすことから来るものだという印象を与える。ニューマンは、模写の購入を通じて、ビジネス世界一筋で生きてきた自分には、縁のなかった芸術世界の庇護者になったような気分を味わっていることは確かである。ジェイムズはそこに、そのような芸術世界に足を踏み入れ、教養や文化の吸収に勤めようとするニューマンが、これまでの彼を作り上げてきたビジネス世界の感覚に基づいて振舞い続けていることを示しているのである。

ところで、フランスにおける美術品の蒐集やその取引についてまとめた陣岡は、「企業家や銀行家ら富裕なブルジョワジーからなる新しいコレクターたちが、日頃の経済活動の多忙を癒すべく、あるいは金銭的成功で得た社会的地位を文化的活動によって裏付けるべく、美術品の蒐集や同時代芸術家の支援に励」(62) むといった動きが、19世紀半ばから後半に盛んになってきたと言う。陣岡は、当時、芸術に関心を示すことが自分の財力を誇示する機会になっていた点も指摘している。また陣岡は、1860年代には大規模な投機的競売が頻繁に開催されたこともあって絵画市場が急速に高騰し、そこに経済成長の著しいアメリカからの参入者が目に付き始めたと言う(64)。

ジェイムズが晩年に創作した大作の一つである『金色の盃』(*The Golden Bowl*, 1904) には、美術品の蒐集により莫大な富を築いたアメリカ人、アダム(Adam Verver) という人物が登場する。ニューマンは、その規模や教養、芸術への精通の度合いからいっても、アダムには到底叶わないが、投資としての美術品蒐集への関心は、ニューマンの中にも見出せる。実際、ニューマンは、ノエミとの模写をめぐる交渉を終えると、そのわずか20分後には、別の模写家と模写の値段交渉を始めている。そこには、金銭の力を武器に、ビジネスチャンスの発掘に熱を上げるような、ニューマンの旺盛な購買意欲や交渉好きな態度が垣間見える。ニューマンは、ヨーロッパに赴いた当初の目的であった文化や教養の吸収よりも、芸術家のパトロンになることで自らの経済力を確認するような、当時の成金アメリカ人の典型的な姿を示していると言えるだろう。

批評家マコーマック(Peggy McCormack) は、『アメリカ人』を含むジェイムズ初期作品の主人公たちと、彼らが置かれた社会に置ける経済システムとの関わりを分析している。その中でマコーマックは、ジェイムズのほとんどの主人公たちが、ヨーロッパの美的価値や文化に魅了され、そこから何かを学ぼうとし、結末では金の力に抵抗するような曖昧な態度を示すが、ニューマンは「経済システムと衝突しながらもそこに共感を抱く唯一の主人公」だと述べている(13)。

結局、パリで投資として模写の購入に大金を使う。しかも模写の購入に際して

金儲けの才能を誇りにし、それを拠り所としているニューマンの姿勢には、彼が批判し逃れようとした拝金主義と変わらない面が見られる。言い換えれば、ニューマンには拝金主義を批判する面がありながら、同時にその性質を自ら体現する面が根強く同居している。ビジネス世界から一旦足を洗ったはずのニューマンにとって、ヨーロッパで新しい人間に生まれ変わるのには困難だったのである。そこには、彼が捨ててきたはずの拝金主義的側面が、彼が思うほどには簡単に消し去り得ないことを見抜く、ジェイムズの鋭い視線が見て取れるのである。

第二章：ニューマンの金銭観に見られる道徳的側面

ジェイムズは、ニューマンが拝金主義的な言動から容易に抜けきれない理由を、彼の経歴に結び付けている。少年時代のニューマンは、その日の食料にも困るほど逼迫した生活を送っており、教育を受ける機会もほとんどないまま、14歳にして実社会に出た。その後彼は様々な仕事に従事し、洗い桶と革製品を売るビジネスを成功させ、一代で富を築いたのである。このようなニューマンの経歴は、わずか数ページで要約されているだけである。それは、ジェイムズが、ニューマンがいかに苦勞して富を得たかということよりも、その結果である成功が、その後の彼の生き方にどのように影響したのかということに、より強い関心を持っていたからではないだろうか。さらにこのようなニューマンの経歴からは、アメリカ西部出身のセルフメイドマンの典型としての彼の姿も浮かび上がってくる。

西部のセルフメイドマンたちの活躍には、リンカーンやフランクリンの物語にも見られるように、アメリカ建国精神に繋がる道徳的な一面がある。実際、ニューマンの模写購入は、自分が金持ちであることの確認作業として、また、ビジネスマンとしての才能を試す行為といった意味を持つ一方で、“...he [Newman] was curious about the progress of his copies, but it must be added that he was still more curious about the progress of the young lady herself” (129) と、模写の代金として彼が支払った金が、貧しいノエミと彼女の父親を助けることにつながることに、彼は強い関心を示している。

ニューマンがノエミの模写に支払った金額は、ノエミ一家が6ヶ月間暮らすのに足るものだった。そうした金銭的なやりとりにおけるニューマンとノエミ父娘との交流において、ニューマンは“Let your daughter paint half-a-dozen pictures for me [Newman], and she shall have her dowry” (54) と言い、彼女の模写をまとめて購入することで、彼女の結婚持参金を用意しようと提案する。そこには、模写の購入を通じてこの父娘を助けたいという彼の願いが表れている。そしてこのようなニューマンの言動を通して、彼が芸術家のパトロンに足る財力を持っているだけでなく、気前良さや人助けの精神も兼ね備えていることを、ジェイムズ

はさりげなく伝えている。

ジェイムズはまた、ニューマンが「人のために金を使うこと」や「人にご馳走することを楽しむ」(196) 人物であると説明しながらも、“...handling money in public was on the contrary positively disagreeable to him [Newman]; he had a sort of personal modesty about it, akin to what he would have felt about making a toilet before spectators” (197) と付け加える。これにより、ジェイムズは、ニューマンの金銭観が、単に自分の力を誇示するためのものではないこと、そしてそこには、ビジネスチャンスを追い求める拝金主義者の態度だけでは割り切れないものがあることを、伝えようとしているに違いない。

同様のことは、貴族社会におけるニューマンの花嫁探しにも窺える。彼は自分の富に見合うような「市場で最も価値の高いもの」(44) として、クレールを自分にふさわしい相手だとみなし、婚約にまでこぎつける。その後、ベルガルド家の陰謀により、クレールと引き離されたニューマンは、一族の秘密を入手し、それを社交界の有力人物である公爵夫人に暴露することで、クレールを取り戻そうと暗躍する。しかしその際にニューマンが見せる、彼の本来の意図と矛盾する反応には、拝金主義者の野望だけでは片付けることの出来ない部分もある。

Newman had come to her [duchess, Madame d'Outreville] with a grievance, but he found himself in an atmosphere in which apparently no cognizance was taken of grievances: an atmosphere into which the chill of discomfort had never penetrated, and which seemed exclusively made up of mild, sweet, stale intellectual perfumes. (289)

ニューマンは、実際に社交界の有力人物を前にした瞬間、ベルガルド家の秘密を暴露するという当初の企てが、場違いなものであることに気づく。つまり彼は、公爵夫人の優雅な客間という雰囲気の中で、自分の抱えている野蛮な感情が、それと相容れない醜いものであると感じ取っている。これは、ニューマンが心底、金のことしか頭にない拝金主義者ではなく、状況を適切に読み取り、自己の利益よりも、周囲に馴染むことを優先させる、繊細な精神を持ち合わせていることを示しているのである。

ニューマンの思い描いた復讐劇は、由緒正しいとされてきたベルガルド家の名を辱めるような秘密が書かれた手紙を火に投ずるという、彼の本来の意図とは正反対の行為で完結する。重要な証拠物件を自ら握りつぶし、復讐の機会を断念するニューマンの行為には、『アメリカ人』以降にもジェイムズが好んで用いる主人公たちの性格が重なる。例えば後期作品の『使者たち』(*The Ambassadors*,

1903) では、主人公が有利で自由な立場にしながら、私欲を放棄することで、彼の強い道徳意識を示している。

同様の崇高な精神は、『アメリカ人』の最後で、ニューマンが復讐の機会と同時に、クレールとの結婚という夢を断念する場面にも窺える。したがって、この時、ニューマンが「金持ちであることを喜んだ」(302) のも、彼の持っている金の力を讃えて、虚栄心を誇示しようとしたわけでは決してない。ニューマンには、明らかに、もっと豊かな精神性が賦与されている。彼はむしろ、自分が金銭的で豊かであったがゆえに、模写や花嫁探しに大金を投じて、閉鎖的で悲劇的な環境から不幸な人間を救うといった、善意に基づく経済行為をなし得たことに満足しているように感じられる。また「金持ちであることを喜んだ」のも、自分にそうした力があつたことを賛美し、自信に満ちているためだと思われる。

第三章：欧米の対立構造にみられるジェームズのアメリカ観

これまで見てきたように、ニューマンの思考や行動には、産業が飛躍的に発展する19世紀後半のアメリカを映すような、行き過ぎた拝金主義的側面だけではなく、アメリカ建国精神につながるような、純朴で勤勉なニューイングランド的道徳観が確かに反映されている。だがジェームズがニューマンを通して描こうとするアメリカ人像はそれだけに留まらない。

批評家タトルトン (James W. Tuttleton) の分析によれば、ニューマンは、ベルガルド家に代表されるような排他的な貴族社会から見た、異質なものとしてのアメリカ人を体現しているということである (109)。そのことは例えば、ベルガルド家が、身近にはいないニューマンのような人間を理解しようとするために、彼を "...an American duke, the Duke of California" (140) と呼ぶことにも表れているだろう。この奇妙な名称は、ベルガルド家が、ニューマンのように彼らにとって新奇な人物を、貴族社会の価値観に基づいてしか判断できないことを伝えている。そのためベルガルド家は、ニューマンの内面をよく知ろうとすることなしに、彼がただ "a commercial person" (218) であるということを理由に、彼と姻戚関係になることを拒むのである。

ニューマンがベルガルド家から排除された原因の一つには、両者の結婚に対する考え方の違いがある。結婚により、ニューマンが一族の一員になると当然のように考えるベルガルド家に対して、ニューマンは、"Oh no, I don't! ... I only want to take Madame de Cintré out of it" (144) と答え、その考えを受け入れようとはしない。そこには、婚姻により家と家との結びつきを重要視するベルガルド家の因習的な考え方と、結婚は個人同士の愛情による結びつきであるという、個を尊重するニューマンの考え方との対立が、如実に示されている。

このような対立を通して、ニューマンの主張を見てみると、クレールとの結婚を望みながらも、ベルガルド家の価値観に寄り添おうとはしない彼の旺盛な独立精神があることがわかる。ジェイムズは作中で二度、ベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) に言及しているが、実際、ニューマンの独立精神や金銭的成功は、フランクリンのそれに似ている。

フランクリンといえば、当時のヨーロッパ人がまず思い浮かべる著名なアメリカ人の一人であるが、フランクリンの実物大の人物像に迫る伝記を記したウッド (Gordon S. Wood) によれば、「フランクリンは印刷屋から身を起し、ヨーロッパの宮廷で貴族たちと対等に交流できるほどの知識と権力を得た人物でありながらも、常に身の丈に合った振る舞いをする人物」であったと言う (50)。またウッドは、そのようなフランクリンを「道徳的に感心できる」(50) としながらも、フランクリンが、「早くは1818年にジョン・キーツ、そして後にトゥエインやシンクレア・ルイス、D. H. ロレンスのような作家たちから、金儲けに励む中産階級のカリカチュアとして揶揄された対象であった」(51) ことにも着目する。ウッドによれば、「人生の目的が単に金を設けることだと考える資本主義の雛形のようなフランクリンは、芸術を嗜好する者たちからは明らかに深みや精神性に欠けていると考えられていたため、このような風刺が発生した」(9) ということである。

こうした伝記からは、成功したアメリカ人には、それに見合うだけの苦労や知識の蓄積があることが読み取れる。フランクリンはこのような風刺の対象になるほど、当時のヨーロッパ人にとって典型的なアメリカ人だったのであり、また、アメリカを象徴する人物でもあった。ジェイムズが、『アメリカ人』においてフランクリンのイメージを借用したのは、彼が、階層社会の価値観を強く信奉する閉鎖的なベルガルド家のような人々とは異質であるがゆえに、分かりやすいアメリカ人像であったためでもあるだろう。

ジェイムズはフランクリンのイメージを用いることで、ニューマンのセルフメイドマン的要素を際立たせ、ニューマンにアメリカが誇れる真面目な勤勉性と、そこからくる道徳性を付与しようとしていた。ジェイムズは、東部出身であったフランクリンのイメージをニューマンに投影しつつも、さらにニューマンに、“Western Barbarian” (42) という名称を与えている。ジェイムズは、ヨーロッパからの派生という意識が残る東部というよりは、西部におけるセルフメイドマンの資質を、イメージしやすいアメリカ的要素の一つとして伝えることで、貴族社会との差異を際立たせようとしていたのではないだろうか。

批評家ハウは、「単一国家ではないアメリカを定義するのが難しいと同様、アメリカ人がどのような人物が言うのも難しい」(443) と指摘しつつも、ジェイムズが西部開拓者と北東部ビジネスマンのブレンドをニューマンに用いること

で、「ナショナル・キャラクター（アメリカ人特有の性質）」(443)の創作を試みようとしていると考える。またハウは、ジェイズがニューマンの中にはホーソンから受け継いだようなピュリタニズムがあるとしながらも、そこに西部人であることを加えることでアメリカらしさをだそうとしていると、とらえている(442-43)。

実際、フランスの因習的な貴族社会とは対照的な、自ら生きる道筋を切り開くセルフメイドマンの価値観を受け継ぐニューマンには、ベルガルド家のように因習に固執した人々からは想像できない、アメリカ人ならではの人生と、それに伴う価値観が、ありありと窺えるのである。

結び：

ジェイズは、ヨーロッパから見た異質な存在としてのニューマンを描きながら、アメリカ人がどういうものかという問いを作品で発していた。その試みは、ニューマンの人物像の中に、拝金主義を否定しながらそこから逃れられないといった矛盾や、野蛮でありながら繊細という矛盾を残す結果となった。さらにその影響は、当時の出版状況にも及んでいる。

『アメリカ人』の出版当時は、国際印刷法がまだ確立されていなかったこともあり、ヨーロッパ諸国で海賊版が相次いで出版された。そしてその結末のほとんどは、ニューマンとクレールが結ばれるというハッピーエンドに勝手に変えられている。ポーランドにおける海賊版『アメリカ人』についての報告を分析する批評家バンタ（Martha Banta）は、「結末がハッピーエンドに変えられていたのは、金銭的な成功をおさめたニューマンにとって、貴族との結婚も可能に違いないという、アメリカ人の金持ち＝成功者というイメージが自然であったためではないだろうか」(35)と主張する。このような結末の変更は、読者がこうあってほしいというヒーロー像から、ニューマンが逸脱していたことを物語っている。小説に娯楽的要素を期待する読者が求めたものは、ジェイズが示そうとしたニューマンの自己犠牲の精神や、禁欲的で堅苦しい道徳観よりは、分かりやすいハッピーエンドのほうだったのである。

もちろんジェイズは、そのような読者の好みを全く理解しなかったわけではない。事実、『アメリカ人』の結末近くの章は、数十年に及びベルガルド家の女中をつとめたブレッド（Mrs. Bread）が、その昔、ベルガルド侯爵夫人が夫に毒を盛ったこと、また長男ユルバン（Urbain）もその共犯者であるという秘密をニューマンに暴露する場面で占められている。これらの描写は数十ページに及ぶが、ニューマンの経歴がわずかに数ページで述べられているのと比べるとはるかに長い。一族の過去の秘密が描かれる最終部分は、ホーソンのロマンス世界を

彷彿とさせ、ジェイズが彼に受けた影響を偲ばせる。また『アメリカ人』のクライマックスは、読者を飽きさせないストーリー展開になっており、娯楽的要素を提供しようとするジェイズのサービス精神が強く感じられる。さらにジェイズは、劇作版の『アメリカ人』(1892)において、結末をニューマンとクレールの結婚というハッピーエンドに変えているのである。

晩年のジェイズは、自選集である「ニューヨーク版」に『アメリカ人』を取めるにあたって、1877年の『アメリカ人』に改訂を加えている。批評家エデルは、ニューヨーク版の『アメリカ人』が、「構造や文体の点では優れている」(424)と認めながらも、1877年の『アメリカ人』のほうを高く評価する。エデルは、「ジェイズが通ったテアトルフランセーズで観たデュマの劇や、当時ジェイズが、パリに暮らす外国人作家という自分と境遇が似ており、その道德表現にも共感を覚え慕っていたツルゲーネフ (Ivan Sergeyevich Turgenev) の『貴族の巢』(A Nest of Gentlefolk, 1859) の影響の痕跡など、若きジェイズが実際に生活していたパリの臨場感が生き生きと伝わってくる」(424)として、若きジェイズの描いた『アメリカ人』に価値を見出しているのである。

しかし、1877年の『アメリカ人』において、ジェイズが最も心を配ったものは、ニューマンの中にある拝金主義的側面と、それだけでは割り切れない、金銭欲に支配されない側面とを描くことによって、アメリカ人ならではの金銭観及び道德観を提示することであったに違いない。ニューマンの内包する矛盾には、当時のジェイズのヨーロッパにおけるアメリカ人としての自分を見直す姿勢も窺える。ジェイズが、ニューマンを、フランクリンを連想させるような典型的なセルフメイドマンのアメリカ人として描こうとしたのも、そのためである。また、金銭的成功を取めたがゆえにその影響から逃れられない一方で、金銭欲に支配されない人間を理想とする生き方をニューマンにさせるのも、アメリカ人という立場に様々に絡まるジェイズの思いが反映されているように思える。そしてニューマンの最後の選択には、ジェイズが後々追求してゆくひとつの理想形がすでに認められる。そういう意味で、ジェイズにとって『アメリカ人』は、彼の創作活動の前期を彩る記念碑的作品として残っていたのだろう。それ故ジェイズは、『アメリカ人』の欠点を認識しながらも、ニューマンの人物像の根幹を変えるのではなく、ニューマンの持ち味をよみがえらせるため、後年の繊細な筆による修正をほどこし、「ニューヨーク版」に再登場させたのである。

宇部工業高等専門学校

Works Cited

- Banta, Martha. Introduction. *New Essays on The American*. Ed. Martha Banta. Cambridge: Cambridge UP, 1987.
- Bell, Millicent. *Meaning in Henry James*. Cambridge: Harvard UP, 1991.
- Edel, Leon. *Henry James: The Conquest of London: 1870-1881*. Philadelphia: J. B. Lippincott, 1962.
- Gettmann, Royal A. "Henry James's Revision of *The American*." *American Literature*, 16 (1945), 279-95. Rpt. in *The American: An Authoritative Text Backgrounds and Sources Criticism*. Ed. James W. Tuttleton. New York: Norton, 1978. 462-77.
- Howe, Irving. "Henry James and the Millionaire." *Tomorrow* 9 (January 1950), 53-55. Rpt. in Norton, 1978. 442-445.
- James, Henry. *The American: An Authoritative Text Backgrounds and Sources Criticism*. Ed. James W. Tuttleton. New York: Norton, 1978.
- _____. Preface. *The American: The Novels and Tales of Henry James*. New York Edition Vol.II. Charles Scribner's Sons, 1907. Fairfield: Augustus M. Kelley, 1796.
- McCormack, Peggy. *The Rule of Money: Gender, Class, and Exchange Economics in the Fiction of Henry James*. Ann Arbor: U.M.I Research P. 1990.
- Poirie, Richard. "*The American*." *The Comic Sense of Henry James: A Study of the Early Novels*. New York: Oxford UP, 1960. 44-50. Rpt. of "The Comedy of Fixed and Free Characters." Norton, 1978. 457-462.
- Porter, Carolyn. "Gender and Value in *The American*." *New Essays on The American*. Ed. Martha Banta. Cambridge: Cambridge UP, 1987. 99-129.
- Rowe, John Carlos. "The Politics of Innocence in Henry James's *The American*." *New Essays on The American*. Ed. Martha Banta. New York: Cambridge UP, 1987. 69-97.
- Tuttleton James W. "Rereading *The American*: A Century Since." *Critical Essays on Henry James: The Early Novels*. Ed. James W. Gargano. Boston: G. K. Hall. 1987. 96-116.
- ウッド, S.ゴードン『ベンジャミン・フランクリン、アメリカ人になる』慶應義塾大学出版 2010年
- 陣岡めぐみ『市場のための紙上美術館：19世紀フランス、画商たちの複製イメージ戦略』三元社 2009年

Self-Assertion of the National Character in *The American*

Tomomi Ushirokawa

The characterization of Christopher Newman, the protagonist of *The American*, is an odd mixture of nobility and vulgarity. While Newman is regarded as a man sensitive to moral values, he is often criticized for his strong worship of money-making. The purpose of this paper, however, is not to judge Newman's nobility or vulgarity, but rather to consider the meaning of being American through Newman's inconsistency, and his relation to an aristocratic French society and the commercial world in America.

Having developed an aversion to the commercial world wherein he was once deeply involved, Newman travels to Europe to study culture and arts. Nevertheless, he seems to be more interested in using his money to purchase a number of copies of artworks than in appreciating the essence of the arts exhibited in the Louvre. He continues to enjoy engaging in business with the copyist as if he were a patron. This behavior indicates that Newman is unable to give up his habit of being a business person easily, even after he comes in contact with the artistic atmosphere of Paris.

However, Newman is also depicted as a reasonable person who is adept at judging what is right or what should be done. For example, Newman gives up his opportunity to seek revenge against the degenerate Madame de Bellegarde and her eldest son, because he knows that such an act would be ignoble despite the available opportunity and the fact that they deserved it. Newman also projects the image of Benjamin Franklin, who was proud of being a self-made man and of his successful career, and who became one of the typical national heroes of America.

Thus, James emphasizes the decent, diligent facet of Newman's personality in contrast to the aristocratic French family's arrogant and degenerate aspects, although Newman's moral sensitiveness seems to be incompatible with his excessive desire for wealth, which results from his activities as a business person.

James, when writing *The American*, was himself an American writer living in Paris who struggled to acquire financial stability through his fiction-writing career. For James, pursuing self-assertion as an American living abroad was

a difficult and important problem; he probably tried to find an answer to the problem in the process of creating Newman's character.

Newman's paradoxical character should also be considered within the context of the publishing world at the time. The conclusion of *The American* was changed without James's permission owing to the absence of international copyright at the time the novel was published in 1877. In some "pirate" editions, Newman and Claire were joined in marriage in the conclusion of the novel. Such alteration implies how common readers wanted a story with a happy ending and how far Newman's actions departed from that. For the readers who wanted entertainment, Newman's self-sacrificing attitude in the conclusion is too stoic to be satisfying.

Although James admitted the inadequacy of his depiction of Newman, he presumably thought that *The American* was one of the most notable works of the early phase of his career. Therefore, the characterization of Newman was not changed much when James revised *The American* for publication in New York Edition later in his career. James thought highly of Newman's nobility and his consideration for moral values.

Ube National College of Technology